

歴史に名を刻む鹿角の偉人

本市は、市内外においてさまざまな偉業を成し得た人を数多く輩出しています。なかでも東洋史学者の内藤湖南と、十和田湖開発の父と呼ばれた和井内貞行の功績には称賛の声が絶えません。先人顕彰館では、郷土の誇りの足跡を紹介し、先人の「浪漫」と未来への「遺産」を伝えています。



内藤 湖南

内藤湖南（二八六〇～一九三四）は、東洋史学および中国学の第一人者といわれる人物です。上京してからの約20年間はジャーナリストとして活躍し、優れた論説や著者を刊行して、その見識の深さは人々の注目を集めました。

たびたび中国を訪れており、学者や政治家らと交流を深めています。

京都大学の教授に迎えられ、学問上でも多くの学者に影響を与え、中国史研究の専門家としての地位を固めました。



和井内 貞行

和井内貞行（一八五八～一九二二）は十和田湖の興起に力を尽くした人物です。22年の歳月と私財を投じてヒメマス（マス）の養殖に成功し、恵み豊かな湖に生まれ変わらせるとともに漁獲のすべてを提供するなど、凶作に苦しむ湖畔住民を幾度も救いました。また、周辺に旅館を建設し、さらには国立公園選定の陳情をするなど、十和田湖観光の礎を築いた功績は、長く人々の心に刻み込まれています。

「きりたんぽ」発祥の地

秋田名物「きりたんぽ」は、本市が発祥の地と伝えられ、その昔、猟師やヤマゴと呼ばれる山の伐採や炭焼きを生業としていた人たちが、作業の合間に食した鍋が起源とも考えられています。また、この地を訪れた南部藩の御境奉行が初めてこれを振舞われた際、その美味に感心し、形が槍のたんぽ（鞘）に似ているところから名づけられたとも伝えられています。

現在のきりたんぽの原型は、鹿角地域で醤油が普及し始めた明治初期に完成したものと考えられており、今でも新米の時期には、市内各地で「たんぽ会」が開かれるなど、鹿角を代表する郷土料理として受け継がれています。



「きりたんぽの日（11/11）」に子どもたちとオリジナル体操をする
本市観光イメージキャラクター「たんぽ小町ちゃん」



「きりたんぽ発祥まつり」ではこんがり炭火で焼かれたみそ付けたんぽが味わえます。